

約270年にわたる「バクス・トクガワナ(徳川の平和)」とは、いかなる時代だったのか。イスラム史の泰斗で、日本近世史への深い造詣でも知られる山内昌之・東京大名管教授が刊行した大著『將軍の世紀』(上下巻、文芸春秋)は、徳川將軍15人の治世を追いながら、日本が諸勢力分立の中世を脱し、統一的な国家体制の整備へと進むさまを描く。リーダーのあり方や、史論的要素も豊富に盛り込んだ江戸通史だ。



戦国乱世を終焉に導いた織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の三英雄。その中で山内氏が最も高く評価するのは、家康という。「いま一般に人気があるのは信長で、徳川時代は過屈だと思われがちだけど、私としては疑問がある。歴史における至上価値はやはり平和であり、国民に負担を強いることなく平和を維持する君主こそ優れたリーダーなのであって、その観点から評価すれば家康、秀吉、信長の順になりますね」

# 統治者から見た「徳川の平和」

## 「將軍の世紀」刊行



山内昌之 東大名管教授

昭 やまうち・まさゆき 昭和22年、北海道生まれ。学術博士(東大)。専門はイスラム地域研究と国際関係史。「スルタンガリエフの夢」(サントリー学芸賞)、『ラディカル・ヒストリー』(吉野作造賞)、『中東国際関係史研究』など著書多数。平成14年、司馬遼太郎賞。18年、紫綬褒章。

代を重ねるごとに、官僚制の整備や大名の序列化など、全国支配の土台は曹斐に固まっていた。

歴代15人の中で、地味ながら評価が高いのが4代家綱だ。「將軍はうるさいことを言わず、老中や若年寄ら高級官僚を介して統治する」という徳川の行政機構が、最終的に完成を見たのが家綱の時期。こうしたシステムを整えないと、権力は水統化しない。焼失した江戸城天守の非再建決定や玉川上水の開削など大きな判断を下す一万人、人間の力は非常にもろやかで、家臣間の必要な支出を惜しみ、幕府の屋台骨を自ら毀損した。幕府瓦解のターニングポイント

るという徳川の行政機構が、最終的に完成を見たのが家綱の時期。こうしたシステムを整えないと、権力は水統化しない。焼失した江戸城天守の非再建決定や玉川上水の開削など大きな判断を下す一万人、人間の力は非常にもろやかで、家臣間の必要な支出を惜しみ、幕府の屋台骨を自ら毀損した。幕府瓦解のターニングポイント

「本音では開国やむなしと認めているながら、自分は長年攘夷論を唱えて地位を築いてきたから、いままら開国派に振るわけにはいかない、などと漏らす。政治家として、きわめて無責任な態度と言わざるを得ない。そして彼の率いる尊皇史観は、幕府のためにという彼の主観と根本で両立しない。徳川の政治家としては、明らかに失格です」

「政治家の一番の評価基準は、統治者として有能であるかどうか。つまり、民に平和や幸福、繁栄、豊かさを保証できるかであって、個人の性格や倫理性は二義的な問題です」

長年にわたってイスラム史を研究し、中東における近代化の問題を考えてきた中で、日本と比較する視点は常に持っていたという。明治以降の近代化を準備した徳川時代を見渡して、改めて現代と共通する面も多く感じた。『日本の統治機構、特に天皇と將軍の関係ですね。政治的な権能を有しない江戸時代の天皇と、戦後の象徴天皇制における天皇は、近いものがあるのではないかと。そうした現代の問題を考える際にも、この時代は非常に興味深いのです』

(藤井慎吾)